

三河 アララギ

平成二十六年

十月号

第六十一卷 第十号



ニューヨーク日記(96) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

July 21, 2014 : Lac Léman

Blue Shoe Diaries



一年ぶりのジュネーブ!何時来てもレマン湖奇麗!晴れていて奇麗なのは当たり前のように
だけどこんなに曇っていても水が鏡のような色に見えない?ドラマチックな空と雲。この
日は大きな虹も出て最高だったんだけど写真は失敗。。。ニューヨークから離れてこ
んな環境にまた住んでみるのも良いかもな～

It's been a year since my last trip to Geneva! It never ceases to amaze me how nice and beautiful the lake is. It's gorgeous on sunny days but I love what cloudy days like this do to the water. It makes it deeper and shiny like a mirror. The sky and clouds, dramatic. There was a big rainbow on this day (had a photo fail on that one) also. Makes me wonder... might be nice leaving NYC for this kind of environment again...

目次

第六十一卷第十号(通卷七三〇号)

表紙 栗	
ニューヨーク日記(96)	
感銘歌 御津磯夫第十歌集	
歌集「スモン」	
「三羽鳥」	
釈迦如来	
京都古都	
初秋	
野ぶどう	
真夏の畑	
浄瑠璃	
紙芝居	
米寿	
アカネトンボ	
母の味	
天の声	
素麺	
狐の嫁入り	
花火	
夫の初盆	
孫と	
地蔵会	
命なり	
無患子	
なた豆	
夏のある日あるとき	
御輿	

今泉 由利 (1)	
Blue Shoe (2)	
大須賀寿恵 (4)	
岡本八千代 (5)	
今泉 由利 (6)	
弓谷 久子 (7)	
青木 玉枝 (8)	
内藤 志げ (9)	
林 伊佐子 (10)	
安藤 和代 (11)	
遠藤 脩子 (12)	
足立 晴代 (13)	
鈴木 孝雄 (14)	
清澤 範子 (15)	
伊藤 忠男 (16)	
富岡 和子 (17)	
森岡 陽子 (18)	
伊与田広子 (19)	
近藤 映子 (20)	
半田うめ子 (21)	
杉浦恵美子 (22)	
平松 裕子 (23)	
小野可南子 (24)	
山口千恵子 (25)	
夏目 勝弘 (26)	
阿部 淑子 (27)	
阿部 淑子 (28)	

蝉時雨	
揚羽蝶	
現代学生百人一首	
『ことよせ』	
私の一首	
『俳句』	
かさね吟行会	
『酔いの徒然』(30)	
ある自然科学者の手記(29)	
絹の話(47)	
物理学者と詩歌の世界(57)	
短歌に詠まれた茂吉	
楽しい時間(23)	
大磯(2)	
「水魚」のことから(165)	
ことのはスケッチ(430)	
歴代天皇御製歌(二十九)	
編集室だより(二〇一四年八月)	
和菓子街道(96)	
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	

白井 信昭 (28)	
秋山 逸穂 (29)	
東洋大学 (29)	
いーはとぶ (30)	
夏目 勝弘 (32)	
林 伊佐子 (32)	
半田うめ子 (33)	
弓谷 久子 (33)	
植村 公女 (34)	
小池 清司 (34)	
小柳千美子 (34)	
森岡 陽子 (35)	
柳田 皓一 (35)	
丸山酔宵子 (36)	
大橋 望彦 (40)	
今泉 雅勝 (42)	
一石 (44)	
鮫島 満 (46)	
山本紀久雄 (48)	
夏目 勝弘 (50)	
岡本八千代 (51)	
今泉 由利 (52)	
貫名海屋資料館 (53)	
平松 温子 (54)	
平松 温子 (55)	
平松 温子 (56)	

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

しみじみとわれはけふ聴く木々の葉にふる雨の音草の葉の雨

P 129

人の世の音さへぎりつつ竹むらは我には見ゆるふかさささやき

P 128

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

立ち上りしばらく足踏みせしのちにスモン病む吾歩みいだしぬ

お茶の実かさざんかの実か椿かと女人吾等に青き実一つ

硝子ごしに舞ひ落つる羽先を見つつをり道德教育講習の会

「三羽鳥」

蒲郡 岡本八千代

をのこの友三羽鳥といはれぬし人ら三人嗚呼亡き人の数

黒塀に落書してある傘マークにカズアキ八千代の文字大きかりき

てのひらに無花果一つをのせたればいちじゆく一つのそのいのちかな

ふしぎにも描きたくなる時描かむとすけふはいちじゆくうすの淡黄いろの実

けふよりはわれも血圧の薬のむ疑はず口に白き一粒

出かけむと庭に出でたりノボタンの花片散りしく紫の径

四日ばかり猫ココと吾のみにしてココにしゃべりぬ人間のやうに

静岡より今宵は帰る夫に煮むじゃがたら芋と肉の鍋もの

小夜更けて独りの時に転びたるを帰りし夫には未だに言はず

時忘れ本読まむとする私も或は文学が好きかもしれない

釈迦如来

東京 今泉 由利

両の手に包み彫りゆく角材は次第次第に釈迦如来

D51の蒸気機関車動輪のそのゆえにして新橋集合

無造作に骨細胞の積重ねどどん育つアルゼンチノサウルス

スーパームーンいちばん小さくなる時刻六本木の空近くゐる

何事も無かりしごとく穏やかに今日の一夜のスーパームーン

まばたきのまばたき毎に灯り増し本当の夜になりゆくところ

おのづから百年の音色うかびゐて大田黒元雄音楽公園

遊歩道車道猫道通り抜け角川源義に逢ひにゆく道

ホオノキに真白ひと花残りつつ秋の草々七草揃ふ

病人といふ症状の無きままに病人ほどの診断をもち

京都古都

豊川 弓 谷 久 子

始めての真夏の京都古都の夏四季それぞれが胸に行き交ふ

京都タワー展望室にて東山三十六峰眼下にしをり

月おくれの七夕まつり京の夜みさとに浴衣着せてやりをり

子に腕をとられつつ歩む鴨川ほとり七夕まつりの人波の中

竹林に佇ちて暫し仰ぎをり竹の葉づれと嵯峨野の空よ

齊王の禊俣びて掌を合はす昔ながらの野宮神社

四百年の時空を越えて今ここに火縄銃あり甲冑のあり

笹尾山高台に佇つこども又つはものどもの夢のあとかと

足どりも軽くみさとは登り行く笹尾陣営展望台へ

少しだけ歴史齧じりて満ち足りて我が夏の日の旅は終りぬ

初秋

新城 青木玉枝

四季を通じ何故か私は初秋あきが好き紅葉迄の変わりゆく木の葉
残り世の縮図を独りえがきつつ侘しき悲しき楽しきはなし

山寺へ続く細道彼岸花赤くつゞきて石段見上ぐ

この足が昔の様に元氣ならトントン石段上りゆくのに

満光院その名を覚え山里おぼの初秋の大気胸一ぱいに

今日は又猛暑が朝から押しよせて去りゆく蝉の鳴声はげしく

山里に二年の生活たつきふり返る余りにも侘し始めての体験

廊下一つ渡ればデイの部屋集ひし老人ひとの元氣な声を

週二度の渡り廊下をゆき返り悲喜こもごもを胸に抱きて

デイの部屋昔なつかしメロデイーに楽しく唄ふ今日のひと日を

野ぶどう

豊川 内藤 志げ

犬走りを小さき蜥蜴が走り去る尾の瑠璃色が眼裏に残る

陽射しなく涼しき風ゆく花の畑心ゆくまで草を取りたり

焼酎の瓶を傾けあと僅か自己流に漬けし野ぶどうの酒

葉も茎も体に利くと知りてより自己流なりとも煎じて飲まむ

行き帰る草々の中に野ぶどうに一つ二つと実の色づき初そむる

側道のヘンスに絡む野ぶどうの節毎に付く巻き蔓強し

背延びして土手の野ぶどうやすやすと長き蔓を持ち上げ帰る

盆の茄子網に守りて傷みなく彼地ら此地らにもらはれてゆく

今の年も在所の父母に手作りの盆のぼたもち供え得たり

盆の花臭木花の薄みどり高速道の土手に連らなる

真夏の畑

岡崎 林 伊 佐 子

キャベツ葉に鬼の面^{つら}して蟪蛄は葉蔭に避暑する真夏の畑
鳩一羽首を振りふり庭に来るインコの餌をまきたる朝は
鈍豆の葉裏に潜む天道虫暑さをしのぎ昼を眠れる
日光浴森林浴を楽しみてふる里の山をひとり登りぬ
帰省して友の死を知る盆の墓おなじ年にて悲しみに充つ
供花飾り盆のみ墓に額^{かぶ}ずきて幼な日の母の面影しのぶ
今際なる母に添い寝の幼な日の心離れず八十路となりぬ
白菜の種をまきたる雨後の畑残暑きびしき今日は処処の日
今の世に無農薬野菜を培いて自給自足の老いを楽しむ
花首を軽くゆらして向日葵は昨日の雨の雫をはらふ

浄瑠璃

豊川 安藤 和代

孫の使いし丈の短かき鉛筆でけふも一首を書きとめてをり

その紙も学園便りの裏の白樂しみ喜びささやかにあり

テレビはひとり水戸黄門が流れいて夫の寢息を穏やかに聞く

手作りの野菜ジュースを差し出せばしぶしぶと飲む夫はかわいい

細やかに葉はギザギザののこぎり草誰れ名付けしや花はやさしき

草刈り機の音の聞こゆる朝の窓青草香り夏深みゆく

浄瑠璃の好きだった私のじいちゃんは健在ならば百四十齡

釣り名人とも言われじいちゃん酒も好き五合の晩酌に乱るるはなし

じいちゃんの馴じみの駅裏居酒屋は銭湯となり今美容室なり

夕風が涼しさ運べばジョキングや散歩で賑わう川沿いの道

紙芝居

蒲郡 遠 藤 脩 子

鉢底を貫き地に生ひ大きく伸びしデュランタ宝塚未だ蕾みえず

集中力続かず乱れし文字となる十三枚の紙芝居の裏文字

気に入りの本読み耽る丸刈りの夫の時折りの少年の顔

音は聞こゆれど言葉は聞こえぬと耳萎えの夫の声力無し

屋根上を走るが見ゆ高架の電車は雨催いの夕べさらに音高し

アブラゼミの声も暫しで止みてのち遠くよりツクツクオーシの声頻りなり

爆^{はぜ}る種子の零るる前に抜くべきをこの夏もまた逃せしカタバミ

ルドベキアはいまだに咲きつぎ陽を浴びて黄に光りつつ庭を彩る

咲くたびに切り花にして三度目もまた小さき蕾つくこの桔梗は

眺望の邪魔になるとて幾度も剪られたアボガドいまも健在

米 寿

東京 足立晴代

梅雨晴れてし碧き空あり木漏れ日の輝く日射し天の恵を

未曾有の激しき雨に稲の穂の打ちしおれたる姿悲しき

雨足の道深々と溢れ出流れの中に戸惑う人々

流れゆく土砂に埋もれはかなくも尊き命奪はれにけり

紙一重命運強く助かりて幸ありし人の喜び

ひまわりの真向う強き太陽の盛夏に挑む雄々しき様に

戦前と戦中ありて様々な人生模様友と語りぬ

大正の末に生まれし吾なれど戦争語る人となりたり

秋むかえ米寿(満)となりぬ吾なるが日々健やかに過ごす幸

過ぐる年まみえむ四季の変わり様天の恵みを望む日々なり

アカネトンボ

沼津 鈴木孝雄

これでもかこれでもかと袋井の花火締めは圧巻大スターマイン
腹にまで響く頭上の大花火匠の意気に大きな拍手

スーパームーン雲に邪魔され見らねども潮の高さに大きき描く

夏休みに合わせるようにやって来たソーダガツオとゴマサバ・シーラ

盆終いアカネトンボがゆったりと飛び交う姿に風も涼しく

豪雨被害ニュースで惨状みるにつけ地元の災害少なさ感謝

西日本の呪われたような大雨に日毎の水やり文句を言えず

麦わら帽子蚊取り線香腰につけ真夏の菜園いざ出陣

ウリハムシ補殺すれども数に負けキュウリの季節今年は終い

水やりは一切ないのにミニトマト枯れることなくつぎつぎ赤実

母の味

春日井 清澤 範子

副作用の症状深くなりつつも最善を尽そう命ある限り

穂高の郷は田の畔黄色に稲穂出て赤くダリアの花の咲く頃

今日は幾分涼しかりけり吾が部屋の窓より風を入れアララギを読む

低気圧はまた発達し木をゆする風の中にも蝉の声あり

台風の過ぎたる朝は蒸し暑く小鳥の声を蝉がかきけす

月に一度また三月に一度の診察重なりて汗をふきふきバスから降りる

母の歳より四年も越えて吾は居る塩ザケの入る白菜汁母の味の

面接に持つべく履歴書パソコンにて職務経歴書打ち込みて行く

娘は求人誌より応募する二度面接なり簿記の資格二級持つ

十一号台風過ぎ夜のとばり東の空に煌々の月

天の声

大阪 伊藤 忠 男

天空に上りて我を見下ろせばこの世の悩み何と小さな

ヒグラシの鳴き声届く朝心嬉し哀しか楽し寂しや

もう良いと覚めた心で諭す我まだこれからと別の我言う

あたふたと寝起きのままで駅へ急ぐ変らぬこの日またおとずれる

面長に丸顔四角瓜実と飽きぬは朝の通勤電車

日が沈む時早くなり秋風が心に体軽やかにする

庭先の虫鳴く声に大雨の警報解除間近を知るや

天の声風音地の声虫の声知らせる声に人救われる

ちよつとした偏西風の揺らぎさえ逃げ惑う人なんと無力な

人はどこどこから来てはどこに行くまだ見えない人の未来は

素 麵

東京 富岡和子

ニュームーン月下美人は満開に暗闇ともに香り身にしむ

さし始む秋海棠に光る露きのうの酷暑なかつたように

堂々と裏の垣根で山牛蒡ピンクの茎に五弁の小花

盆過ぎて椎の洞で法師蟬夫婦ことなく大盛り素麵

交替す冷房部屋をお隣と婆々ら抵抗原発アウト

予定あす志布志上陸チヨウ台風今宵トウキョウ十三夜月

乗りあわす成田特快夏休み会話と熊なりのグローバルなり

クーラをいで雷門を仲見世へそのとなりでは人力車夫を

おかしいね必死にさがす着る物を喜寿いわいをすると知らせのありて

斎場へこみ合うホーム通勤時悲しみの日の猛暑警報

狐の嫁入り

東京 森岡陽子

大潮と台風梅雨と重なりて何時もの道は川となりなる

愛犬の疑い持たぬ眼差しの澄んだ瞳も老いて濁りぬ

何時の間にこんな賑やか蟬の声梅雨明け嬉し山も開きぬ

目の前によもやの気色広がるは夜空に光る遠雷と花火

師を偲ぶ献杯の声耳寂し今宵晴れるも月はいままだ

緋毛氈敷かれし不動の瀧の縁台に抹茶風味のぶっかき氷

真夏日も静風涼しき美術館江戸錦絵に鼻高高く

明るくも屋根うつ音に雨気配狐の嫁入り干し物しまわず

雨止みてむしりやすかり庭の草すぐ止めにけり足元泥泥

若き時憧れいだきしアメリカ風家並残るジョンソントン

花 火

豊橋 伊与田広子

大き雷わが家の上にて鳴りをりぬ恐怖のあまり何も手につかず
かみなりの鳴る度ごとに生徒らの騒ぎだすわが家の前の中学校

雨止みてわが家の辺り静かなり祇園の花火音も聞こえず

薄暗くなりて初めて音のする花火のみゆる窓を開けたり

休みつつ花火見をれば寝て仕舞い覚めれば花火終わりをりぬ

わが町は雨の降らねど九州は大雨降りて土砂災害も

雨降らず庭に柿の実落ちてをり木に残る実をわれは探しぬ

数減れば大きくなれよと水を撒く特に柿の根本に多く撒く

マゼールの来日最後の交響曲チャイコフスキーの第四番

マゼールは八四歳にて逝去せしわれも来年同年注意せん

夫の初盆

名古屋 近藤 映子

わが夫の初盆迎える仕度等今は娘に頼りてをりぬ

夕時に盆提灯にスイッチ入れ廻る青い光は寂しき光

夕暮れに盆提灯にスイッチ入れ線香焚けば又涙ホロホロ

初盆の夫は帰らぬ人と成り吾に因どう伝える行事よ

退院後の吾の体の動き尚にぶくただ夫の写真を見上ぐるばかり

仏壇の前に座すれど声も出ず夫の写真を見上ぐるばかり

多忙なる娘の声は強く聞こえ吾つぶされまいと声を高めぬ

初孫の「麗美」の成長目覚ましく此の半年の成長の笑み

あふれ出る涙もふかず甲子園野球のテレビ背後に聞きて

盆過ぎて家紋入り提灯片ずける手元は何故かゆるくと

孫と

新城 半田うめ子

もみじ葉の散りしけるなり静岡の国道を行く温泉へ向ふ

静岡の館山寺温泉心地よく孫まごと楽しむ時々なりぬ

必要は無きと思ふも針や糸多くを買ひて楽しかりけり

初めての田植したりき思ひつつ緑田の多き杉山を見る

あたたかき心根なりし浅場様植物の先生親切なる行為

山里さとの杉林の中今日も又白さぎ数羽舞ひてくるなり

白さぎの舞ふ姿の美しく楽しみつつ散歩するなり

老いたりて川辺を歩くさぎ草をさがしつつ今日も散歩するなり

地蔵会

蒲郡 杉浦恵美子

我が暮し無機質とさへ言へまする諍ひ相談愚痴など無い故

肝付きのかわはぎ煮付けて客を待つ煮魚なんて我が為にはせぬ

枝豆もつるむらさきの和へ物も客ありてこそ我も張り切る

我が夫が作つて呉れた数々の料理殆んど踏襲できない

我が夫の得意の天麩羅あのようにからつと揚がらぬ幾度試せど

細々と受け継がれたる鐘鋳場の地蔵会接待我も加はる

今はもう十軒ほどの集落の片隅ひっそり地蔵の祭り

接待の一人となつてご近所の指図受くるも我には愉しい

北向きの粗末な石板地蔵なり我が集落を閑かに守る

地蔵会も済みてしまへば集落も再び隣は何する人ぞ

命なり

豊川 平松 裕子

玄関をしばし飾りし鷺草の花ことごとく茶に変わりたり

眼鏡かけぬ我には小さきゴミと見ゆる蛾とし見ゆればつままずにをく

小さけれど小さきなりの命なり机の上の蟻潰しつつ

遠州灘の果てたるところその上に白く横たはる光の帯の

遠州灘の果てなる所その空に白き光の帯横たはる

メヌエットを弾きて見せると我が幼我の据ゑたるキーボードの前

浴室の高窓を閉め今日の湯の温度を一度高くしてをり

伸び伸びて傾き道をはばみるヨメナは小さき花咲かせたり

小さきに花の色さへさやかならぬヨメナを我は庭に育てるし

雑草といふは哀れなり疎まれて抜かるることに抗ひもせず

無患子^{むくろじ}

豊川 小野可南子

夏草の闌けて大きく揺るる道我が軽四はうずもれ走る

ゆつくりとアサギマダラと成りてゆく羽根を広くを見届けるたり

盆迎ふ墓浄めつつゐる我をひとめぐりしてアサギマダラは

しつとりと茄子の紫手にやさし朝の日明るくなりきたりたり

我を見て孫の佑真の一言はどうしてそんなに疲れているの

無患子の実にやはやはの羽根つけて追ひ羽根となるこのふたあつは

この日頃乙女さびたる孫千尋その手にそつと追ひ羽根もたす

明日こそは明日こそ咲かむと待ち待ちし鷺草ひとつ真白清しく

白鷺の今飛びたてる様にして鉢にひとつの花たをやかに

隣家の二番仔燕も巢立ちちして電線に並ぶ四つの姿

なた豆

豊川 山口千恵子

実の入りて食べ頃となれるトウモロコシはや烏きて食ひ散らすなり
するすると天まで届く勢ひになた豆の蔓網のほりゆく

十粒蒔き一粒のみの芽生えなり蒔き時少し早かりしたため
白しろと房になりて咲きはじむ蔓の節ごとになた豆の花

花落ちて尖りしもの見えはじめ淡きみどりのなた豆の莢
舗装路にぼつぼつの雨の降り始む道路濡して雨よ降れふれ

さわさわと稲そよがせて風の吹く海原渡る大波のごと
一面の稲田大きくそよがせて台風余波の風の過ぎゆく

実となりてフウセントウワタはじけたりふわふわ綿毛風に舞ひゆく
台風雨に倒れしミニトマト赤き実もぎとる土つけるまま

夏のある日あるとき

豊川 夏目勝弘

ヘルスマーターの年齢今日より一つ加へる昨日と変はりしはこの一つのみ
岩塩を削り貫き造りしランプより水のしたたる日の続きをり
目に見えぬ雨ふる庭の片隅のハランの葉先に滴が光る
ヒマラヤとふ香の煙りの淡き青ツバメが窓をよぎりゆきたり
アジサイの花玉ゆれず覆ひゐるネムの枝先ゆらす風あり
除草剤に枯れし間ひに早早と芽をいだしをりマルバルコウは
木洩れ日の動く木陰にしばし居り二キロ余りを歩みきたりて
本堂の常花のハスを買ひ変へて今年の盆のお役が終る
予報にて晴れの日続く日を待ちてメ縄用の稲を刈り干す
竹の簀に寝る日の多し右にまた左に寝返へるまどろみのなか

御輿

横浜 阿部 淑子

肌をさす太陽熱にふらつけど夏は暑くて有難きかな

俄かなる発想の種結実しあき箱積みて御輿賑わう

花火会「ほら見えるかい」母に問う息子の姿昔は幼な子

両日でひと月越ゆる大豪雨人命奪う土石流切なし

明日もまたきつと出会えるときめきをとどめて置かむ「短歌」の表紙

蝉時雨

豊川 白井 信昭

遠く近く夜空にあがる遠花火こだまする音聞きつつゐたり

まだ妻の何につけても自由ならず何につけても痛みの残る

わが村のしじまを破り沖辺より昔懐かしい浚渫船の音

海臨む緑地公園に蝉時雨命の限り尽くし鳴きゐる

揚羽蝶

「招待」 秋山逸穂

梅雨どきのうす暗き朝の厨房の窓は薬缶の蒸気をたらす
だるき日は霧雨ながるる窓の辺にひたいおしあて冷気をひろう
蝉の鳴くさくら並木を見上ぐれば梅雨の低雲垂れさがりおり
地下鉄の線路のきわを走りゆく大きなねずみは太りすぎなり
揚羽蝶が飛びかう垣根に香りたつ真紅の薔薇が咲きほこるなり

現代学生百人一首 東洋大学

帰り道夕やけの日がかげ作るかげの私は足長モデル

コロンビアインターナショナルスクール二年 八木まりな
スタンドに一度は入れないホームラン素振りの数は思いの強さ

埼玉県立朝霞高等学校一年 佐藤大涼
それぞれの楽器で別の音鳴らすけど出来たその曲一つのメロデー

千葉県立津田沼高等学校一年 白川菜摘

『ハルカ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

台風の進路に不安なる一夜あけ今朝の青空被災地思ふ

手もみなる一番茶仕上げと添へ書きして故郷よりの薫り届けり

石田 文子

冷え冷えの寒さのほどの漁港ちて今宵の花火の三尺玉仰ぐ

ベビーカーピンクのドレスも買ひ足さむ吾子に長女の産まるるらしく

森 厚子

いつになくカラスの声に出て見れば赤きホホズキくはへ飛びたつ

西空の今日の黒雲流れゆく雨を気にしつつ京都へ向かふ

山崎 俊子

み仏となりて帰り来夫のため今宵より吊さむ盆提灯を

振花のねじれさへをも愛ほしく今年はわれのみ見てゐるこの花

三田 美奈子

足弱のばあばちゃんの身を案じ泣く幼いぢらし今宵は嵐

角立の赤き灯揺れる大戸浜この黄昏を夫と歩めり

水野 絹子

久ぶり孫にさそはれサッカーすけふの青空のま下の広場に

若僧の元に集ひて読経する清々しさに心洗はれり

牧原規恵

蒸し暑く気だるき気分の今朝の朝窓の風鈴ただ音もなく

なんとなく心寂しき今宵にて数多に光る星空見上ぐ

稲吉友江

虹が好きと目を輝かせ語りし君今の夕虹見てをりますか

今日会ひて今日に別れる私たちわが乗る「しらさぎ」はや小松を過ぐ

鈴木美耶子

いつしかに我も姑となりにけり今宵の食卓に嫁の手料理

そぞろ歩く四条河原の夕間暮立ち止まりて見る美しき山鉾

吉見幸子

酒樽にメダカ放ちてメダカたち浮きては沈み沈みては浮く

甕ごとに赤白黒とメダカ入れ斑の一つが現れにけり

牧原正枝

夏空に赤々かがやくカナの花高く高く空の中かな

スーパ―にて声かけくれし同級生キーホルダーには亡き妻の写真

岩瀬信子

私の一首

朝の日を遮ぎる雲の動きの遅し汚れの日立つ窓ガラスごしに

夏目勝弘

自由時間が多くなったためか、見る物見える物が総てゆっくり見える、そうではなくゆっくりとした物しか感じられないようになってしまったのかもしれない。

現実の時間は同じように過ぎてゆくが、自分の時間はたちまちに過ぎるような気がする。

窓ガラスの汚れに一年を振り返えているが、心に残っている物も事もない、同じ日々の生活が続いているためである。

平凡な生活のなかで今後も歌を続けてゆく。

草汁のしみたる手にて辞書を繰る夜のひととき至極な時間

林伊佐子

隣の町の借地畑で野菜を作り、多忙な日々を過しております。農仕事に汚れた醜い手で辞書を繰る。夜のひとときは心の安らぐ至極な時間です。健康で多忙な日々を過せることは幸せです。そしてボケ防止になります。

孫香奈は天女の如く社殿にて浦安の舞ひを美しく舞ふ

半田うめ子

参礼にて、芝居の中へ。美しき着物をまとうその姿を見たいとの希望に、子供の無い私は無理に孫香奈が舞うことを勧め、上手でありし美しい思い出です。

花祭りに浮き立つ山の奥深く人影無かりき戦犯の碑は

弓谷久子

花の季は紫陽花祭りとして名の知られる三ヶ根山ですがその山の奥深くあの戦争の軍事裁判で戦犯として処刑された人等の慰霊碑が建てられている事を知る人は少ないでしょう。

私も十年程連れて行って貰って始めて知りました。人影こそ無かったけれどゴミひとつ無くきれいでした。高くそびえる碑を仰ぎ碑文を読んでいろいろ考えさせられました。昔を語り合ふ人も無くなったこの頃、紫陽花の季となると一人あの慰霊碑の事を思ひ出します。

『俳句』

二人ゐてふたつの心沙羅の花

植村公女

透き通る赤子の耳朶や百日紅

サングラス斜にかけ泪ぐむ

蝉落ちてガリバーの如曳かれゆき

小池清司

ひぐらしに追はれて急ぐ山路かな

蕎麦の花終の住処の定まりぬ

揺れる葉にすがりて鳴くや秋の蝉

小柳千美子

つくつくし戻れぬ日々へ駆り立てる

凭れるる夫婦案山子に鴉鳴く

手を叩き開いて回る盆踊り

森岡陽子

喧さわがしや季節変わるも残り蝉

新涼に調布の寺でそば団子

盆踊り急雨に消えし太鼓の音

白雨やみほとほと雨垂れ潦

柳田皓一

満身の力で抜くやひまわりや

やぶ蚊らの忍者飛行に刺されけり

悠然と孤独の世界鬼やんま

蝉幼虫登る力の高さかな

叩く雨倒るるままの向日葵や

かさね吟行会

(大田黒公園・角川庭園)

八月

田中清秀

かさね吟行会は五月に主宰の佐藤喜仙さんが急逝された後は行なわれていなかったが、師の意志を継ぎ改めて開催することとなった。平成二十六年八月二十六日、荻窪にある大田黒公園並びに角川庭園において松本周二、川井素山、山元正規、柳田皓一、森岡陽子、今泉由利と筆者の七名の参加をもって行なわれた。

荻窪駅に十一時の集合時間には全員が揃い、生憎の曇り空で今にも雨の降出しそうな気配のなか木槿や百日紅の花が咲く住宅街を徒歩で十分、大田黒公園に到着する。山門を抜けると樹齢百年といわれるイチヨウ並木に御影石の歩道が真直ぐ続く。左右の太木はイチヨウのほかシラカシ・ムクノキ・ケヤキ・アカマツなどで根元には蟬の抜け穴が数多く見られた。また、草むらには藪ミョウガやエビネ・ヤマブキ・コササが群生する。園内は手入れが行き届き自然環境をしっかりと守っていることが感じられる。庭の中心に大きな池が配され新潟の小千谷市から寄贈された錦鯉が元気に泳いでいる。その数2、30匹あずま屋から眺める鯉の姿はここが都会地であるこ

とをすっかり忘れさせる。

雨ためて花重たげな木槿かな
抜け穴のまだ新しい蟬しぐれ
身に近くかぶさることき法師蟬
水澄むや軽く水切る錦鯉

川井素山
今泉由利
柳田皓一
松本周二

大田黒元雄氏は昭和五十二年に八十六歳で逝去されるまで四十七年余りこの地で音楽活動を続け晩年まで過ごされた。仕事部屋の有ったレンガ色の洋館は記念館として保存されており室内にはピアノや蓄音機が残されている。また、同氏はNHKラジオ番組「話の泉」の出演でも知られている。

洋館の玻璃に流るる秋の雲
秋の水雲にざりがに乗せており
曇天も楽しむ如し鬼蜻蜒
名石とあずま屋と池秋の園
心なしさみしく聞こゆ秋の蟬

田中清秀
松本周二
森岡陽子
今泉由利
柳田皓一

大田黒公園を後にして隣接する角川庭園に向う。徒歩で数分杉並の閑静な邸宅街に、俳人で角川書店の創業者である角川源義氏の旧邸宅がある。現在は杉並区立幻戯

山房の名前で一般公開されている。入り口付近には大きな芭蕉の木が植えられ、さらにアカマツやウメ、武蔵野の雑木林を思わせるコナラ・エゴノキ・ホウノキなどを配し俳句に相応しい野趣あふれる庭園となっている。

秋燕や人影うすき屋敷町

山元正規

前庭に石置く虫の秋

山元正規

月の出を待ち待つばかり尾花立ち

今泉由利

庭園内には自然石を組み合わせた石畳の小路、ハギやオミナエシ・キキョウなど秋の七草が植えられ、また、爽やかな音を奏でる水琴窟や開放的な茶室からは庭園を眺められるなど、工夫をこらし俳人としての源義の想いを受け継いでいる。四季折々の花や草木を楽しむことができる

曇天に色深めたる女郎花

松本周二

秋風や古しへ語る石畳

森岡陽子

一陣の風を離さず女郎花

山元正規

先達の句碑読む庭や秋の露

川井素山

一掬に水琴窟の秋の声

田中清秀

それにしても蚊が多く居るのには辟易であった。人に

嘯み付く蚊は雌のみで産卵の栄養補給に人の血を吸うと言われている、吻から逆流する蚊唾液がかゆみを誘発するらしい。吟行の一興とは言えぬかゆさである。

秋の蚊につきまとはるる雨の庭

山元正規

吟行に悩みのつきぬ蚊の名残

松本周二

句会は庭園内の詩歌室で行なわれ、開放的な明るい室内から簾越しにスキの風に揺れる景色が見られさらに詩心を刺激する。瞩目5句の作句、清記・披講・選句を午後三時過ぎ散会。

■かさね句会の吟行■

日時	2014年10月28日(火)
場所	海ほたるから木更津散歩
集合	川崎駅東口出口 10時
交通	高速バス
句会場	未定
昼食	海ほたるにて各自昼食
復路	17時、木更津駅から高速バス
申込	森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』(三十)

丸山 醉宵子

『大海原の二日酔い』

空を見上げれば満天の星がゆつくりと動いている。太平洋のど真ん中、「アー……いい湯だな……」ここは、ダイアモンド・プリンセスの露天風呂である。

船旅の経験は、もう半世紀ほど前、学生時代に台湾基隆港(キールン)から横浜まで、8000トンの今にも沈みそうなおんぼろ貨客船で一週間。冬の荒れる狂う東シナ海は、ロマンチックな船旅とは大違い。船酔いがひどく、吐くものも無くなり、胃の粘膜が切れて吐血。大波が船室を直撃し、大揺れに揺れて今にも海底に沈んでしまうような恐怖の連続。

もう船旅はこりごとりと半世紀にわたって思い続けてきたが、この夏、英国船籍の豪華客船ダイアモンド・プリンセスで、北海道サハリン10日間クルーズに乗り込んだのである。116,000トン、乗客2500人、乗務員1500人、将に18階建ての超一流国際ホテルがそっくり移動しているようなもので、お客の国籍も国際

色豊か。世界の料理を提供するレストランは和洋中の全部で6つ、お好み料理を好きなだけ。勿論バーはオーセンティックバーをはじめいろいろなタイプが6つ程。4ヶ所のプールサイドにもバーカウンター。劇場、映画館、スポーツジム、勿論カジノもあり、全て至れり尽くせり。

ひとつの小さな町が突然出来上がった様なもので、10日間とは言えそれなりの国際的ルールが必要で、毎日夕食はドレスコードがある。通常はジャケット着用の上マートカジュアルであるが、ウエルカムディナーと船長主催のパーティーの2日はフォーマルウェアで、ロングドレスの愚妻とともに久々にタキシードと洒落込んだのである。

夕陽に染まる横浜港国際棧橋を静かに出航し、横浜ベイブリッジを船橋すれすれにくぐり抜け、一路太平洋を北海道に向けてクルージングの始まりである。2日後、最初の寄港地は釧路、そして翌日は知床半島をゆつくり眺めながら北上し、興味津々、北方領土のサハリンへと向かったのである。

サハリン(日本名:樺太)はロシア帝政時代の流刑地で、日露戦争の勝利で南半分をロシアより割譲。(蛇足です

が、何故全土を割譲しなかったのか・・・?) 新たに鉄道も敷設され、多くの日本人が開拓民として移住していたのである。しかし、第2次大戦でソ連に奪還され、現在はロシアのサハリン州となっている。

港に着けばずらりと並んだ大型観光バス。「ハラシヨ、ハラシヨ!」しつかり舗装された幹線道路で1時間。大型レーニン像のある市の中心部へ。どういう訳か、別にトイレに行きたくもないのに、走り始めて15分ほどで大型アイスホッケー施設に止まり、強制的トイレタイム。トイレも清潔、手洗いエアー乾燥機、ベンディングマシーンも唐突に設置され、超現代的アリーナの中も見学自由。「あのウー……。私たちは日本に復帰したいなんてこれっぽっちも考えていません。本当に満足していますからご心配なく。ここでは領土問題なんて全くありません。残念でした……。」と、無言で強調しているようである。

早く船に戻ってプールサイドで、ビールでも飲んでゆっくり本でも読みたいと、早々と退散し、陽が燦々と降り注ぐプールサイドへ……。今の気分はビールよりラムだと、『ラム&ソーダのライム搾り』を注文……。

事ほど左様に、ただ只管(ひたすら)怠惰なりラック

スタイムで、呑み続ける訳である。しかし、呑兵衛にとつて残念なことは、お酒代が別勘定になっていること。朝からのプールサイドのビール、カクテル、食事時の食前酒、ワイン、アフターデイナーのウイスキーとかなりの料金。しかし、そこは世界的エンターテインメントの極致、一日飲み放題で49ドル也。貧乏呑兵衛の性(さが)で、早く元を取らなければと、ついつい飲みすぎて連日の二日酔い……。

海原のプールサイドは夏旺(さか)ん

酔宵子



ある自然科学者の手記 (29) 大橋望彦

『科学の世界とアートの世界の間で』

自分が歳を採り八十歳を越えると、流石に、祖父母は当然として、両親、伯父、伯母、叔父、叔母も全て他界し、兄、姉、下手をすると年下の兄弟、姉妹とも永遠に遭えないことも多くなつて来る。実に不思議で、眼前に判然と憶えて居る人達がもうこの世に居ないのである。友人でも、親友として付き合ってきた友を亡くしてしまうのは、肉親との離別より亦別の感じ方で、淋しい。青春時代を共に享受してきた連中である。自分の記憶をもぎ取られる様に思う。其れ丈に、現在、お付き合いしている方々、兄弟、姉妹を問わず、近隣の人、社会的な関係のある方達、等々全てが大切に思えて来るのである。一期一会とは良く言ったもので、実に微妙な接触で生じている。此の狭い範囲の、人生で遭遇する機会のある人間関係は、そんなに広くは無いが、選ばれた人にランダムに遭つて居るのであるか？ 何か、自分の存在位置が判らなくなる様な気がする。

フトした機会を知り合つてから、意気投合して深い付き合いとなる事は良くある事である。このフトした機会と言うのがランダムなのであるか、必ずしも、そうは言えない事もある。常々脳裡にある事柄で、機会が選択されて来ている事

も確かである。脳裏にあればこそ、話が合つて来る事が多いとも言える。然し、それとは逆に、全く自分の脳裡には働いてない事象で、偶然出合った事が急に関心を引く事もある。

是は、科学の世界では極めて大事なものにヒントみたいなものである。其れでも、アートの世界を覗くと、実は是が誠に多い。一つにはアートは感覚の世界だから、波長が合えば、専門外の事であつても直ぐに自分に取り入れる場合が可能と言える。科学では、そうだと思つても、実際に実験に掛かる為には、予め実験計画を立てねば為らないので、単なるエモーションナル(情感)のみでは実現が難しい面がある。然し、アートでは、早い話、今、其のモチーフが浮かんだとすると、その場から作品の制作に掛かることも可能な場合もある。これはアートの速効性とも言つて可い、恐ろしい事ではある。其れ丈に、下手をすると、モチーフは良かったが、創造性に、今一、と言つた具合の事も生ずる。其れでもアートの多様性は十分評価可能となる。でもアートにも色々流儀の様なものがあり、この様な多様性は絶対受け入れはならないものもある。即ち、所謂、伝統芸に類するもの等で色々な仕来たりやの制約を受け、外部からの技法の流入を中々受け入れられない。其れでこそ伝統なのである。一つの完成されたものを崩したく無いのである。

科学の世界では、伝統なる言葉は、余り聴かない。ただ、たとえば外科手術の方式等で、その技術がほとんど固定しているものもあるが、其れは術式が、この様にすれば、確実に

結果が出て来ると言う、数学の公式に近いものもある。具体的に言うなれば、胃の手術に梶谷環先生（故梶谷環癌研病院長、外科部長）の伝統的術式がある。是は、難しい手術でも、この様な手順とやり方で行えば、確実に成功する方法を解いた方式とでもいう物で、癌研究所の病院では伝統的に行われていても、伝統として固定化されているものではない。幾らでも、改良される部分は改良可能と言える。是は、彫刻家が、木の逆目に彫刻刀当てるのには、この様なやり方をしなければ失敗する。と言う経験的術式が在るような物で、其れは伝統でも何でも無い公式なのである。この様な多くの公式を数多く経験して、知識を有するものがベテランとなり、師匠となるのである。此の辺りは、科学もアートも一緒であるう。

この様な事を考えると、豊富な知識を持つていけば、全てベテランとなるかと言うと大間違いで、そう言う人が、其れでは立派なアーティストになったり、大科学者になれるのであるか？ 何故成れないのかは、知識丈では評論家になれても、創造する者ではないからで、結果を示す事で、評価が決められる。全て多くの知識を超えて、其の表現力に差が出来て来る。是は、受け取り側にも責任がある。其の表現が理解でき、十分な鑑識眼を持つて初めて正当なる評価が出来るのである。科学の面でも知識や理想、真似事文では正当な結果は決して出て来ない。そして評価されない。

これ等を考えると、科学とアートとは極めて類似点が多い。これは『ものづくり』の点で、その精神面で一致して

いると思っていたが、其れ丈では無さそうである事に気付いた。思考過程迄もが類似している事が多い。

只、科学の世界では飛躍が突如出て来ては困る。やはり、論理が判然と在っての意表を突くような実験結果は素晴らしい。其の点、アートでは突然の飛躍は歓迎される。特別な説明も必須ではない。『佳いものは佳い』のである。

最近少し違和感のする言葉が流行っている。其れは、音楽分野で、矢鱈と、「アーティスト」と、言われる歌手が増えてきた。最近では、歌手若しくは演奏家であれば、即アーティストなのであるか？ そうだとすると、アーティストの定義が変わってきたと言わざるを得ない。少なくともアーティストは芸術家と訳せると思っていたが、どうも芸術の定義すら怪しくなる気がしてきた。鼻持ちならない芸術家も居る事は居るが、最近では、如何にも鼻持ちならない芸術家の氾濫のような様相を呈して来ている。その様なアーティストが出て来たと思うと、一年もしない内に消えてしまうのも多い。やはりこういうアーティストは止めて欲しい。アーティストと言うのはどんな歌手でも否定はしないが、少なくとも、其れなりの哲学が存在し、多くの人に共鳴感を与え、簡単に取り壊せないものを主張して欲しい。其れが直ぐ飽きられてしまう様なアートは存在価値が無い。其れは、今まで言ってきた科学者の領域とも極めて離れているからその様に思うのである。

絹の話 (47) 「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

家畜化された家畜

【人類の進化と家畜】

人間はいつの時代から家畜を所有するようになったのだろうか。私が1970年頃、南太平洋のニューギニアの東に位置するニューヘブリデス諸島のマレクラ島奥地を訊ねたときは、人々の生活は石器時代を抜け出したばかりと思われる状態でした。男はベニスサックを付け、背中や胸は畳表の様に細かい傷で飾られていました。

日常は狩猟生活で、家畜らしき物はいませんでした。自分は野豚を何頭持っているという人もいるが、それは森の中を走り回っている牙を持った獐猛なイノシシと思われる野豚でした。野豚の襲撃の多い部落は環濠を廻らし自衛していました。これは家畜とはいえないでしょう。唯一飼育している動物は同じ野豚で、鼻輪にする為に、餌を食べる時、固い物を食べて牙が折れなく、丸くブレレットの様になる迄、飼育しているものくらいでした。食肉の為ではない様でした。野菜やタロイモなどの計画

的畑も有りません。布を織る様な事もない極めてシンプルナ生活です。全て野性の物を食べているのです。

現代人の顎は農耕生活と共に小さくなり、上顎の歯が下顎の歯にかぶさる様になって来ましたが、この人達の歯は上下が噛み合わさっている様に見えました。人類の進化は野菜も動物も魚、昆虫までも家畜化の歴史なのではないでしょうか。そこから富の偏在や争いが起きて来た様に思えます。世界各地で養殖された食用昆虫は少しずつありますが、同一ノウハウで世界的規模による家畜化された昆虫は家畜より他に有りません。それを一大産業に仕上げた利益が中国3千年の栄華の基礎となったのでしょうか。

【天然食材のこまや、ますや】

氷河期が過ぎて地球が温暖化され始めると、山野に様々な動植物で満たされて来ました。ところが野性の動植物は身を守るため、苦味や臭さなど様々な自衛手段を持っています。野菜は改良に改良を重ねて食べやすくしたものでしょう。昨今の若者は野性に近い軍鶏(シヤモ)の肉は堅くて人気がありません。ブロイラーの鶏肉の方

が喜ばれます。顎がはつている男性はシャモが旨いといいますが、顎の小さな女性はまずいといいます。

山菜の苦さを年配の人は旨いといい、子供達は苦味を消する機能が発達していませんので好みません。「蓼喰ふ虫もすきずき」という様に虫は自分の持つ消化酵素で食性を決めていきます。強烈なアク等を持った葉を選んだ方が、他の虫との生存競争が楽なのです。既に路地野菜（葉物、トマト、キュウリ等）は固い、臭い等のクレームが多いので一般の店頭から姿を消しつつあります。軍鶏の例に見る様に、天然ウナギやアユ等も珍重されている様ですが、食感や香りに躊躇する人もいると思います。人間も体系ばかりでなく、食感や消化機能も意外に短時間で変化しているのでしょうか。

【富岡製糸所と絹産業】

野性のクワコが家畜化されて5千年。まだ金属器等が普及する以前に、虫を家畜化して量産体制を確立した事は脅威に値します。しかし繭から糸を作る事はずつつと手作業で行われて来ました。その製品にはどうしても個人差が出来、地域の特産物的販売ならそれでよかつたの

ですが、明治政府の国策産業として輸出振興をしようとする、規格化がどうしても必要となり、ヨーロッパ全域で微粒子病発生し、蚕が育たなくなり、稼働出来なくなった動力による最新式設備を技術者と共に日本の富岡に移築したのです。千年以上前は、中国や韓国から製糸技術を盛んに導入したのですが、絹産業では後発のフランスから技術を入れると云う、歴史の妙を見る事になったのです。

ここに蚕の家畜化と共に、糸の自動繰糸が完成し、近代産業の一端を担うことになりました。野蚕も明治の初期中国から柞蚕を長野県に導入しましたが、天蚕と同じ様に近代的製糸技術では制御出来ず採算的にも家蚕に比べて不利で、次第に飼育農家がなくなっていました。野蚕は品種の改良等も行われていますが、エリ蚕を除いて家蚕の様な家畜化には成功していません。野蚕は路地野菜以前の山菜や天然ウナギに匹敵する物なのでしうか。

自然を守るという事と色々な物を家畜化する事はイコールではない様に思えます。

物理学者と詩歌の世界 (57)

一石

ヴェラ・ルービン

ヴェラ・ルービン (Vera Rubin) は米国の女性天文学者。「銀河回転問題」の先駆的研究により、暗黒物質(ダーク・マター)の存在を明らかにした。

ルービンはフィラデルフィアでユダヤ系移民の家系に生まれた。父親はリトアニア出身の電気技術者、母親はモルドバ・ベッサラビア出身。幼いころから天文学に興味があり、高校生のときには天体望遠鏡を自作。1948年にヴァッサー大学卒業後、プリンストン大学を希望したが女性であるという理由で受け入れられず(この規則は1975年に改訂されるまで適用された)、コーネル大学でR・ファインマンやH・ベータの下で物理学を学んだ。1954年、ジョージタウン大学においてG・ガモフの指導下で博士号を得た。

現在はCarnegie Institute of Washingtonのシニアフェローとして研究を続けている。全米科学アカデミー会員。ノーベル物理学賞の有力候補と目されている(参考資料1)。

ルービンは1970年に「アンドロメダ銀河の回転」という論文を発表し、観測結果に基づき「アンドロメダ

銀河には目に見えない暗黒物質が大量に存在する」と主張した。アンドロメダ銀河は私たちの天の川銀河の最も近くにあるいわゆる渦巻き銀河。円盤状に集まった数千億の恒星は銀河の中心を回っている。ルービンの観測はいわゆる光のドップラー効果に基づくもので、それによれば、こちらに近づいてくる星やガスは青く、遠ざかる星やガスは赤く見える。彼女は銀河の中にあるいくつかの星やガスを丹念に調べ、銀河の回転速度が銀河の中心から遠く離れた外縁部でも遅くならないことを発見した。中心からどこまで離れても、ほぼ同じ速度で回転しているというのである(注1)。外縁部の星が中心部の星と同じスピードで動く理由はいったい何なのか。観測結果と符合する重力と遠心力の作用を考慮した最も合理的な理由は、星が少なくなる銀河の外縁部にも目に見えない物質が満ちているということだった。それゆえに外縁部の星は高速で走り回っても強力な引力で銀河に引き留められているというのである。ルービンのこの大胆な主張に対する学会の反応は反発と批判と無視であった。しかし彼女はめげることなく約10年にわたって観測を続け数多くの銀河を調べ上げた。そしていずれの銀河でも外縁部の星々が中心部の星々と同じ速度で動いていることを示した。もはや疑いの余地はない。こうして彼女は暗黒物質が宇宙に確かに存在することを証明したのであ

る(注2)。

受賞歴に以下のものがある。アメリカ国家科学賞(1993)、英国王立天文学士院金メダル(1996)、ブルース・メダル(2003)、ジェイムズ・クレイグ・ワトソン・メダル(2004)など。小惑星「アステロイド5726 Rubin」はルービンを称えて命名された。

ルービンの言葉から。

1) 名声とははかないものです。私の(観測して得た)数字は私の名前より多くのことを意味します。もし天文学者が私のデータを今後も使い続けるのであれば、それは最大の褒め言葉になるでしょう。

2) 私の人生においては、「私の科学」と「私の宗教」は別なものです。ユダヤ教徒の私にとって、宗教はある種の「道徳律」であり、またある種の歴史でもあります。私は「私の科学」を倫理的に実現しようと努めます。そして科学は、理想的には、宇宙における我々の役割を理解する助けとなるべきものだと思っています。

注1・太陽のまわりを惑星が回転している太陽系においては太陽に最も近い水星が高速で動き回っているのに対し、最も遠くの世界王星はゆっくりと回っている。この現象は引力(重力)と遠心力のなせる業。引力の影響は距

離が離れるほど弱くなる。太陽の強力な引力を受ける水星は太陽に飲み込まれないように高速で動いて遠心力を獲得し、内側に引つ張られる力と均衡させている。他方、太陽から遠く離れた海王星はゆっくり軌道を回っている。海王星の平均速度は秒速5.5キロメートルほど。これに対し水星の平均速度は秒速48キロメートル近くもある。「常識」によれば、こんな現象はアンドロメダ銀河でも見られるはず。銀河の内側は星が多く外側は星が少ない。だから内側では強い引力が働くし、外側では引力は弱くなる。つまり太陽系と同様、内側の星は強い引力には遠心力で対抗しようと速く動き、外側の星はゆっくりと動いているはずだ。ルービンの観測結果はこの「常識」を打ち壊すものであった。

注2・2003年、NASAによるWMAP衛星の観測は宇宙全体の物質エネルギーの構成を明らかにした。なんと74%が暗黒エネルギー、22%が暗黒物質で、我々が知る通常の物質は4%ぐらいしかないことが分かった。また2013年、欧州宇宙機関はプランク衛星の観測結果として暗黒物質は26.8%と発表した(参考資料2)。

参考資料

- 1) Wikipedia. the free encyclopedia: Vera Rubin
- 2) Wikipedia. the free encyclopedia: Dark Matter

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十八 土屋文明²

前号に続く雲取越えの歌から始める。

君が行きし路の清水の変らずば次ぎ継ぐ影も清くあ
りこそ
昭和四十八年『青南後集』

題詞に「中辺路茂吉歌碑に」とあり、その歌碑には前
回もとりあげた「いにしへのすめらみことも中辺路を越
えたまひたりのこる真清水」（昭和九年『白桃』）が刻ま
れている。文明はこの歌の「のこる真清水」に向かつて、
それが茂吉の見たままであるならその返す光も清いまま
であつてくれと詠んだのである。

熊野八たび二たび君と共にしき中辺路の山中辺路の

川

年おきて行くに花にも逢はざりき汗になやみし君を

ぞ思ふ

ひとたびは足に苦しみひとたびは心苦しむ君にした

がふ

山みちびくをのこにも君が愛憎のきはだつ様を見し
もかなしも
昭和四十八年『青南後集』

「熊野中辺路回顧」と題する四十九首中の歌。文明は
およそ半世紀前のことを回顧しているのである。一首目
の「熊野八たび」は文明が雲取・中辺路に八回足を運ん
だことを言い、「二たび君と共にしき」はそのうちの二
回は茂吉と一緒だったことをいう。二首目は、最初の時
は松風草の花に逢ったのだが、二回目にはそれもなくた
だ汗に苦しむ茂吉の姿が思い出されるといっているのである。
四首目は、茂吉の気むずかしい一面に接したことをいう
のである。

花ならぬ桜の下にも寄り立ちきその花に遂に君あは
ざりき

道のべの清水は人のまにまにて澄みみ澄まずみつぎ
て流れむ

中辺路を踏むに十年の間ありてなほ乏しらに我等行
きにき

放ち難き憂ありとも相共に樂しかりしよ御崎の温泉
浴み
同右

一首目は、花どきを過ぎた桜の下にも立ったが、思え
ば茂吉は二度ともその花には逢わなかつたと詠む。二首

目には昔からの清水が絶えぬように茂吉とのことも忘れ
ることはないという心が表れている。四首目は、共に
忘れることのできない悲しみ、苦しみを抱きながらも海
辺の温泉に入ったことは楽しかったというのであり、茂
吉も、「たちまちに燈消してしましむる湯の峯の夜に酒
を飲みたり」（昭和九年『白桃』）と詠んでいる。

遠々に来て診たまへる君がまへにくどくど病を云ふ
父を聞く

わが父の病を診むと来たまへる君と浅草のみ寺にま
うづ
昭和四年『往還集』

註に「父なほ病む」とある。この「君」が茂吉である
という確証はないが、文明の交際範囲からみてもそうだ
と思われる。近藤芳美もそう推測し「文明の父は東京の
どこかの下町の『震災バラック』に臥している」と想像
している。

ありありと今宵思ひ出づ浴場の上の室蕪煮て賜びき
三十三年前

すこやかに君がいませば吾さへにかく従ひて長く生
きたし
昭和十八年『山の霧』

題詞に「青山脳病院を憶ふ」とある。青山脳病院が全

焼したのは大正十三年十二月二十九日で、茂吉はこの
ニュースをヨーロッパ留学を終えて帰国する船上で知っ
た。帰国後、茂吉はしばらくは焼け跡の「浴場」を書齋
として使っていたのであり、一首目はそこでのことを思
い出しているのである。二首目は、あれから三十三年経っ
た今でも茂吉が健やかだからこれからも傍にいて長生き
したいというのである。

君すみし三年みとせ思ほゆ聴禽書屋障子ひらきてみゆるた
たみも
昭和二十三年『自流泉』

「大石田にて」と題する一連の一首目である。

この一連を読みながら私は茂吉がまだ大石田に住んで
いるところを訪ねたことを詠んだものと解していた。
まさか茂吉が帰京したあとを訪ねることがあるとは思
わなかったのである。しかし、これらの歌の中には現実
の茂吉はいない。すなわち、昭和二十二年に茂吉が帰京
した後に大石田を訪ねたのに違いない。「君住みし」は
今に継続していない過去を表している。茂吉が住んでい
た二藤部家の離れで、のちに茂吉が名づけた聴禽書屋の
戸が開かれていて主のいない部屋の内部が、その畳まで
もが見えるというのである。数年前に訪ねたときのこと
をありありと思い出したであろうことが想像される。

楽しい時間 23

山本紀久雄

2014年8月31日

前号から続く。アイスランドは2008年に国家経済破綻したはずなのに、翌2009年から男女平等度合い指数が世界一になって5年も続いている。どうしてか。国家破綻した場合、通常ならば混乱が数年は続くだろう。不思議だ。この疑問を解くのも「楽しい時間」であり、現地訪問の二回目報告である。

まず、アイスランドの現地で感じたのは、いったんは変化したように見えるが、いざ大問題に出くわすと、本来の姿に戻ってしまう、国も人も大きく変われないのだということ。

1980年代中頃までのアイスランド経済は、タラ以外はほとんど展開していなかったが、世紀末にはGDPの10倍あまりに値する国際バンキング帝国を築き、グローバル・エコノミーの偉大なサクセス・ストーリーのひとつとなったが、2008年10月にそのすべてが崩壊した。今は写真のように屋外温泉ブルーラグーンに大勢の観光客が訪れ、何ごとのなかったような平和な



姿に戻っているが、2008年10月の経済破綻時は大変だった。国民は一か月間自宅に引きこもり、どういう事態になるか息をひそめてテレビとパソコンの画面に釘づけになっていた。その間、首都レイキャビクの街中は人の気配はほとんどなかった。一か月後、国民は首相官邸の前に集まり、卵を投げ始めた。これはアイスランドで最大の侮辱を与える行為である。

通訳女性も経済破綻の被害者である。彼女は15年前にアイスランドに came。この時、日本人として26人目と言われた。今は82名いて、大使館も2000年に設置されている。

彼女はアイスランド人と結婚し、家を購入した。その際、ローンを組んだが、銀行からアイスランドクローナ・スイスフラン・円のどれを選ぶか聞かれ、円を選択した。当時の円為替レートは1クローナ≒2円。そこで1000クローナに該当する2000万円借り入れし家を購入した。だが経済破綻した結果クローナが下落し、2000万円返すには2000万円÷0.90円≒2222クローナを支払うことになった。約二倍の支払いがこれからずっと続く。当然に苦しい。対策は家を処分するか、それとも大変だが借金を返すしかない。折角買った家なので手放したくないので支払いを続けていると、乾いた笑いをもらす。24年前にガイドしてくれたA子さんとも家を売却し、これが離婚の原因とも、この時点で分かった。

ここでアイスランドが国際バンキング帝国を築いたストーリーを振り返ってみよう。

それは1999年3月13日から始まった。アイスランドの小さな証券会社の従業員120人全員が、彼らのバラ色の未来図を描くために、レイキャビクに近いスキー・リゾートに集まった。予定されていた公式行事の最後に、バーでの会合

が半時間だけ開かれ、会社のCEOが演壇に歩み寄った。彼は、あたかもそれが事実であるかのように、明確かつ整然としたやり方で、段階的計画を申し渡した。彼は、5年以内で株主持ち分の25倍増と、銀行のバランスシートの約15倍増を予測した。

銀行はさらに多くの国で支店を開設し、アイスランドというよりも、むしろまさに北欧の投資銀行として知られるようになるであろう。彼の話が進むにつれて、従業員のおしゃべりは途絶えた。彼らは疑いの目を持って互いに見つめあい、そして、驚嘆してスピーカーをみつめた。この会社の名はカウプシングであった。CEOはシグルドゥル・エイナソンで、この会合はアイスランド・バンキング産業の空前の成長時代の始まりを刻印したが、彼の演説で展開された「エイナソンの原理」は、「大きいことはいいことだ」というスローガンの凝縮される。エイナソンが1997年にカウプシングのCEOになったとき、彼はバンキング業がまさに漁業や農業と同じように、その本来の意味での産業であると宣言した。

2000年にフェロー諸島、ニューヨーク、ストックホルム、2001年にコペンハーゲン、2002年にスイスで開店。

カウプシングの従業員には、定時の営業時間外に従業員のためのあらゆる種類の課外活動を奨励し、彼らが自分たちの経営陣を無条件に支持し、彼らこそが最良の銀行だという信念を誇示したがゆえに、カウプシングの従業員は他の銀行によって「ヒトラーユージェント」（ナチス・ドイツの少年団）と呼ばれたほどであった。

エイナソンの経営のもとで、カウプシングの規模は1995年から2006年まで毎年ほぼ二倍の成長をみせ、アイスランド人はこのカウプシングを見習い、これと同様

の働きをした結果、アイスランドのGDPは2003年から2005年の間に約19%成長し、1%以下の失業率と14%の政策金利にもかかわらず、2006年〜2007年も経済の上昇軌道が拡大し、アイスランドは一人当たりGDPにおいて地球上で最も豊かな国になろうとしていた。

だが、幸運絶頂期に崩壊が訪れ始めるもので、リーマン・ブラザーズの破綻によって、一気に急速に暗闇に落ち込み、2008年10月6日、アイスランド政府は非常事態を宣言し、全国民が一か月間自宅に引きこもる事態になった。しかし、経済破綻による幸運も発生した。というよりアイスランド人の本性が表面化したのである。

通貨暴落は輸出ドライブへとつながり、經常収支が大幅に改善、アイスランド国産食品の消費増となり、出生率も向上、本の売上も急上昇、劇場のチケットも記録的な売り上げを示した。また、危機を導いた「男性型経営」の反省から、国有化された銀行には女性が新CEOとして就任した。この女性経営トップ登場が本来のアイスランドの姿なのである。

というのもアイスランドでは、女性の地位の高さはバイキング時代以来の伝統で、男性が海外へと出稼ぎの間、地域社会と家庭を守ってきたのが女性だから、世界最初の女性大統領も出現している。加えて、2010年5月にエイヤフィヤトラヨークトル氷河で大規模な火山噴火があり、ヒースロー空港など、ヨーロッパ各地に多くの影響を与えたことで、再度注目を浴び、結果として観光客が2012年は30%増の60万人と訪れた。経済成長率も2013年2.87%と順調、経済危機に苦しむEUを上回る成長を見せ、アイスランドは先祖返りし、素晴らしい国に戻った。このように一国の実態をつかむ作業も「楽しい時間」と感じる。以上。

大磯(2)

夏 目 勝 弘

子規が病気の保養のために大磯の松林館に來た経緯を明治二十五年(二十六歳)の年譜には。

五月三日風邪のため一日臥褥、五月四日風邪の気味残る。九月九日まで勉学に励んでいたが、兩三日前から血痰だこの朝や濃くなる。

十月三日羯南を訪問し今後の事を相談。

十月四日に高浜虚子に退学の意志と経過を報告する。

今日の大磯は台風八号の影響にて雲厚く海は荒れ、砂浜と海にサーハー六名のみ。

白ざれた太い流木に掛け、缶ビールとワサビ入にぎり飯一つの昼食。

視界の悪く荒れる海をボンヤリと見ながら子規の、月見の句を思い浮べ時をすごした。

○新暦の十月五日月見かな

○どの松にかけてながめん今日の月

周辺を歩いてみたが松の木は、二十数本余りそれも五十年もたないものばかり。

○月出んとして鳴り立つる海の音

目の前の海は台風八号接近のため、海の音は波の攻め合いが響きとなって伝わってくる。

○いろいろの形となるや雲の月

台風からの雲が厚く重く大磯の海を押しつけている。視界は照ヶ崎がボンヤリと見えるのみで一キロもないであろう。

○名月やもういきで雲の外

月が出ていたとしても今夜は厚い雲のなか

○名月や大海原は塵もなし

寄せてくる大波が返える波をのみ込み次の波と重なり合う。

その響きが伝わってくる。

○後じさりしながら戻る月見かな

荒れ狂う海を背にしながら大磯の駅へ戻ることにした。

子規が大磯で病の保養を決めた理由が、十月三日付の松山の大原恒徳あての手紙に。

あらましは、大磯へはたびたび来てをり、病気のためには松林がよいとのこと、そして不便ではないのも保養には良いと決めた。

十月七日早朝起き外出、波の音の間あいまに、エンヤ〜という声が幽かに聞える。

その声の方に行くと、海人たちが地引網を引いている。七八歳から十二三歳の子供たちも共に網を引いている。

網が上り、竹籠を持っていた女たちが近づき網のなかをのぞき、おの〜つぶやきながら、その場から去って行く。

海人の肩ごしに網の中を覗くと、シラスという白魚が一掴みしかない。

「大磯に引き網を見る記」には俳句はなく短歌一首が載っている。

○いさりするあまの妻子はやせにけり

あはれうろくすよ逃げずもあらん
年譜より

十月七日 朝・地引網を見る。

十月八日 時々小雨。波音が高い。夕方、犬を引いて浜に至り小亭にて波を見る。

十月九日 終日小雨。宿に籠る。

十月十日 終日雨で宿に籠り、理想の詩を作る。(漢詩)

十月十一日 雨、晩、晴れ間。箱根行きを志すも雨で果さず。

黄色の稲、青い波が足下に集る。雨に逢う。

十月十三日 午後晴れ汽車で大磯を發ち国府津に至り、鉄道馬車で湯本に行き鎌倉屋に宿る。

「氷魚」のことから (165) 岡本八千代

「身の飾りいっさいつけず活^くしたし」「あなたはだんだんきれいになる」かも。

これは私の歌である。どうしてこういう歌が生まれてきたかはわからない。今の私のおしゃれ心かもしれない。「あなたはだんだんきれいになる」は高村光太郎の「智恵子抄」の詩の中のことばである。ふとそのことばが浮んだにすぎない。——かくして私は、子規のことを書こうとする……。

子規全集別巻三「回想の子規より、彼の再従兄弟に当たたる三並良氏の「子規の少年時代」を参考に書いてゆく。

子規と三並氏とは兄弟のように仲良しであった。前回で書いたように、松山城下でちよんまげを結髪をしていたのは二人だけだったが、ついに許されて、断髪屋へ行ってきた二人は、すごく愉快であつたらしく忘れられないうれしいことだつたらしい。

その頃はまだ殿様が居た時代で、彼らは子供ながらに「大の刀も腰にさしたり、上み下の服もつけて、正月には往来した」とある。それから、廢藩置県の時代となつて、小学校も新設されたのであつた。

二人は、この小学校へ入学した。といつても、法龍寺という寺に設られた寺小屋式の学校であつた。

二人は、文庫と称した箱膳のようなもの内へ、硯や筆墨紙、書物一切の用品を入れて、お・つ・ち・り・よ・つ・ち・り・持・つ・て・出・か・けたのであつた。それは明治六年のこと。

それから、正式の小学校へ子規といつしよに二人は入学した。ところで、幼ない頃教えてもらつた観山先生は、明治八年の春、永眠された。まだ五十八歳であつた。

しかし、二人はやはり、藩の儒者土屋三平という先生に漢学を学ぶことになつた。小学校へ入学しても漢学は別に勉強していたのであつた。彼らは三平先生に、やはり朝早く五時か六時頃には先生の前に出て勉強していた。「子規はこの先生にいろいろと学んだ」と三並氏は言っている。五経や八大家、戦国策、史記、春秋、資治通鑑、日本外史、政記、皇朝史略等々だつた。

三平先生は「確実な人で決してごまかさなない。字引を机の横に置いて、それは「玉篇」だったが、解らないと、待たしておいて一々引いてから教えた」とある。これが小学時代のことであるから、子規と三並氏ともによく学んだ人たちと驚く。

二人は、書物には不自由しなかつた。観山先生の蔵書も、殿様の蔵書も自由に借りることができたのであつた。また習字の時間には「先生お話し」とねだつて、遠山先生は、いつも、「悟空」の話をしてくださったなど、ゼスチュアをしながらであつたらしくて「面白く聞いた」とある。次回はまだまだ子規たちの勉強のようすを書く予定。つづく。

ことのはスケッチ (430) 今泉由利

『天照大神』

天照大神は、機織り小屋に神衣を織られ、神田の稲を育まれ……新嘗祭をとり行なう日本最初の太陽神であること。祖父が語り教えて下さった昔。

それ故、私自身の人生を始めるにあたり、織物、染物、糸造り、図案……テキスタイルの辺りを選択したのだった。

「天照大神」を知りたい！とこのごろ思い始め、「古事記」を読み、私の頭ではついてゆかれない神々の様子に挫折。

ドナルド・キーン著「日本文学の歴史①古代、中世篇、日本」の創造（紀元前六六〇年）よりお教えいただく。

三人の神が、高天原に出現するところから始まり、様々な神が、誕生し、島々が生まれ、最初の英雄、イザナギとスサノオノミコト、スサノオの姉アマテラス。

アマテラスは、水田で稲を育て、織を織り。残酷で怒りっぽいスサノオの仕業に怒るアマテラスは岩屋に身を隠す。世界は暗となり「天岩戸隠れ」には、太陽の必然性の意味を知り、農耕、豊穡への母なる女神、天照大神の記録された日本のはじまり。

神が人間のように表現され、現在に続いている様を知る。皇統譜には、天皇家の始祖として「天照大神」の記載があるという。

ようやく岩屋から誘いだし、スサノオは大蛇を退治するな

ど英雄になってゆき、スサノオが花嫁に宮殿を建てるとき詠んだ和歌。

八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を

太陽の女神、大地母神、そのうえ武力、軍事力へのパワーも備え、日本の最高神として君臨された天照大神、霊石山へ行宮されたときの、朝日に輝やく樹氷を詠まれた、二千年以上の時を経た和歌。

天照大神御製

あしひきのやまへはゆかじ しらかしの すえもたははに ゆきのふれしは

紀元九〇五年に編まれた「古今和歌集」は、日本詩歌の理想を述べ。紀貫之の仮名序「やまとうたは、ひとのこころをたねとして」とある。

歌とは、歌人の心の内を表現することであり、妙技をひけらかすことではない。「体験への忠実さ」が初期の歌から重視されている。

五七五七七で詠うものは、直感でとらえたものであり、短い詩の中に凝縮され余韻をとまなう。

日本の国のはじまりから、和歌の存在したことを知り、和歌のリズム五七五七七に携わり生きてこられたことを心の底からうれしく思う。

「歴代天皇御製歌」(二十九)

買名海屋資料館

『村上天皇』第六十二代・在位九四六年(二十一歳)―九六七年(四十二歳)

村上天皇は、醍醐天皇の第十四皇子。摂政・関白を置かず、ご自分で政務をされた。後世「天曆の治」と政治史、文化史を、たたえられた。宮中に「和歌所」を設け「後撰和歌集」が撰ばれる。紫宸殿の西側に「橘」東側に「桜」。これが「右近の橘、左近の桜」のはじまり。

吹く風の音にききつつ桜花目に見えずもすぐる春かな

(玉葉1250)

風の噂を聞きながら、桜を見ずして春を過ごしていますよ。

教えおくことたがまずば行末の道遠くとも跡はまどなし

(後撰1379)

教え伝えることに、たとえ道のりは遠くても、先人の辿った跡を見失うことはないでしょう。

編集室だより【二〇一四年 八月】

○テレビのドキュメンタリー番組、アマゾン紀行を見ていた。植村直巳の見たであろうアマゾンの欠片でも見たく、自らアマゾンへ分け入ることがある。その時の見聞が、画面に写し込まれ、蘇る、蘇る。

ジャングルに堆積した地球規範の葉っぱから染み出る煎じ葉の色のネグロ川から熱帯魚が発生したとか、太古の地球の変動で、海のイルカが河のイルカになっていたり、巨木板根をたたいてみたり…。アマゾンになつてしまつていた頭に、八月がはじまつた。

○三河アララギの裏方事務を、東京に移す手続きをしてきた。発生地协会会员たちに沢山のことをし続けて欲しい願ひも、それぞれの都合により、東京で確かに引き受けます。

○「サマソニック」。海外のミュージシャン、国内のミュージシャン…を集め、まさに「ど肝を抜く」。もう十五年來の夏恒例のイベントに、玉由が関係して、私も紛れ込んだ。

幕張メッセの全会場、マリンフィールド、千葉マリンスタジアム…。どの会場も、飛ぶ鳥、飛行機、撃ち落さんばかりの大音響。足裏から全身痺れわたる。性格変わりそう。とにかく面白い。來年の夏、是非お出掛け下さい。

○東京都美術館、平和美術展ゆく。平和を望まれる間仲久子氏の「チベットのシガツェの麦畑」を描かれました。静かに、おだやかにほつとしました。

○治療の甲斐あって、骨密度がやっと平均値になったのです。ビクビクして暮らしていたのが、ひと安心。

○三河アララギの校正。森岡陽子さんが助けて下さいました。お互い校正素人でしたが、疑問点など話し合いながら、楽しく為になる校正タイムでした。

○豊橋、松葉町の額縁屋さんと学生時代友人であつて、それ故の私の近所の額販さんに、奥多摩「おくてん」のための絵の搬送をお願いしました。絵と同じ車に、私も乗せていただき、とても快適、楽しい奥多摩往復ドライブでした。

○俳句の「芭蕉」にちなんだシンボルツリー、青い実がなり、大きく撓んだ花つぼみの芭蕉が、まず目に入る角川庭園へ吟行。秋の七草がそれぞれの位置にびつたり定まつて、もう花をつけはじめている…なんとも美しく出来上つた角川源義氏の範囲を楽しみました。蚊がいったばいいたのは大変だった。

ついでの道に、この百年の日本の音楽をリードされた大田黒元雄氏旧居、公園を頼ねた。本当の音楽は流れていなかつたけれど、庭園はおだやかな音楽を奏でてくるかの世界でした。ラジオからの「話の泉」。大田黒元雄氏のダンディな語り口が…私に蘇りました。

和菓子街道 (96)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(19)

松阪をあとに伊勢路の旅を続ける。神宮に奉祀する斎王の居館である斎宮のあった斎宮の集落を過ぎてしばらくゆくと、街道左手に間口の広い古めかしい建物が見えてくる。「へんば餅」で有名なへんばや商店だ。

創業は今から230年以上も前の安永4年(1775)。「へんば」とは「返馬」のこと。元は宮川の畔、桜の渡し場近くに店があったのだが、当時、宮川に橋はなく、舟で旅人を渡しており、ここまで馬を借りて来た人は、舟に乗る前に馬を返すことになっていた。それで、馬を返す場所にあった茶店ということで「へんばや」という屋号になったのだという。

へんば餅は、伊勢地方に昔からある丸い焼き餅だ。「餅は腹持ちがいいですから、参宮客に好まれたのでしょう」と、八代目の奥野宗一さんは語る。江戸時代の国学物・本居宣長も、旅の途中にへんば餅



を買ったことを日記に書き残している。

ご主人の昔語りを聞きながら、へんば餅と伊勢の番茶で一息ついた。店を出れば、じきに小俣宿だ。

団子生地の中に餡を入れて香ばしく焼いたへんば餅

◆へんばや商店

住所：三重県伊勢市小俣町明野1430

電話：0596-22-0097

お知らせ

▽十一月号の原稿は、十月一日(水)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△この八月は、お盆や、子どもたちの夏休みなど行事も多くて、家族の集まりもあり、作歌に集中することが難しい月だったかもしれません。この地方は雨も少なく、乾ききった感じがします。季節は秋に向うとはいえ、まだまだ快適とはいえませんが耐え難い暑さも今しばらくかと思えます。頑張つて行きたいものです。(山口)

■東京農業大学オーブンカレッジ「シルクの魅力を探る 健康と装い」

10/18(土) 10/25(土) 11/8(土)
11/22(土) いずれも13:00~16:30
前半講義 後半実習 体験(糸造り、染色、食べる洗濯)
申し込み 資料請求

電話 03-5477-2562

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様だちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信用封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年九月二十五日印刷 第六十一巻 第十号
平成二十六年十月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目勝弘

発行人

平松 裕子・山口千恵子

発行所

今泉由利

三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒一四一〇〇三二

東京都北区王子本町一の二六の六A

T E L (〇三)五九二四一〇六六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美